

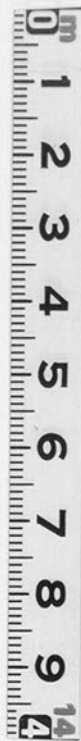
山村暮鳥詩集



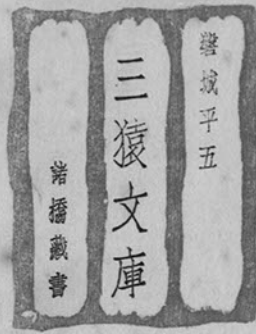
星のひかり九月號

大正十二年八月廿八日印刷
大正十二年九月一日發行（毎月一日一回發行）

二・版



極山



百姓夫婦はむぎかり
すなつば島のむぎかり
かしよ
こもりなたのんだぞ

藝術のない生活はたえられない。生活のない藝術はたえられない。そこに大きな
悩みがある。徹底はそのごつちかを撰ばせすには、おかないのか。
かくて大道演説のような詩があり、美しい病的幻想の詩がある。

術も、二つながら貴い。

分はそこに自分の藝術を求めてゐる。

のはその二三をのぞいて、大方、昨日今日の作品である。

茨城縣イソハマにて

暮 鳥 生

百姓夫婦はむぎかり
すなつば島のむぎかり
かしよ
こもりをたのんだぞ

藝術のない生活はたえられない。生活のない藝術はたえられない。そこに大きな
懐みがある。徹底はそこを握らねばせずには、おかしいのか。
かくて大道演説のような詩があり、美しい病的幻想の詩がある。
自分にさつては生活も藝術も、二つながら貴い。

人間生活の健康さ！ 自分はそこに自分の藝術を求めてゐる。

この小詩集にあつめたものはその二三をのぞいて、大方、昨日^{キノフ}今日の作品である。

茨城縣イソハマにて

暮 鳥 生

イソハマ
イソハマ

イソハマ
イソハマ
イソハマ

15 22 11 12 5 1 2 3
 8, 11 1 12 3 3 3 3 3 3
 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 5 7 3 3

山村暮鳥の詩

一一三四

- | | |
|---|-----------|
| 9 | 朝顔 |
| 8 | 蟹 |
| 7 | 雷雨の時 |
| 6 | 妻と語る |
| 5 | 春 |
| 4 | 遠いふるさと |
| 3 | 朝餉の食卓 |
| 2 | 郊外小景 |
| 1 | 永遠の子どもに就て |

山村暮鳥氏と私
詩と小曲
其他

- | | | | | | | | |
|----|-----|-----|------|----|--------|-----|----|
| 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 |
| 蟬 | ゆう月 | 秋ぐち | ひぐらし | 蝶々 | とうもろこし | 松の葉 | 晝 |

三六——三七
三八——四五

装書 竹久夢二氏

永遠の子ごもに就て

おお お前は

お前はここにねむつてゐたのか

なんといふ深い睡りにおちいてゐたのだ

ほんとにお前は蘇生はつてでもきたようにみえる

お前はいつもみてもみづみづしく

お前はいつものちに充ち溢れてゐる

お前はちからだ

お前はのぞみだ

お前があるので醜い世界もうつくしく

そして人間銘々は生きてゐるのだ

永遠の子ごもよ

永遠の子どもよ

お前をみうしなつてからの自分が
どんなにひびくくるしんだか
くるしみくるしんできたこそか

お前は知るまい

だがそれでいい

それでいい

何もきいてくれるな

前額ひだかにふかい此の皺々

ふしくれたつた此の手

さては冬枯れの野面のようなところ

それらについて

自分はなんにもいひたくない

自分からいつかはなしにきえうせた永遠の子どもよ

それでも自分をわすれずに

よくまあかへつてきてくれた

おお お前は

お前は一どかへつてきてくれた

草や木のみどりのようにかへつてきた

蒼空のさんばさしよにかへつてきた

そしていまもいままで

もろこし畑のどこやらで

鳴くギツチョンをきいてゐる

自分のうちにめざめてお前は

それはさうとお前の瞳めには

どうしたものか

あげほの寂しさがある

郊外小景

さほくさほく

天のはてにみえる

山脈の

はつきりとした紫紺色

そのいただきは

まっ白だ

よくみるさ

その山かげからはそぼそ

一すぢのうすい煙が立つてゐる

おや、あんなところにも

自分達とおなじような

人間がすんでゐるのだらうか

それなら

あの煙のしたには

鶏もないてゐるだらう

子どももあそんでゐるだらう

なんだか

そこがたいへん

いい國のような氣がしてならない

この麥畑の運を

まっすぐに

どこまでもどこまでも

いつてみたいような氣がしてならない

朝餉の食卓

ぜいたくのかぎりをつくしたのではないか
自分達のこの食卓は

青葱のいつもの

くさい味噌汁のほか、かうして
はるばる遠いハコグテのともから
おくられてきたばつかりの

鈴蘭が

まだいきいきと匂つてゐる

何といふ朝餉だらう

それなのに子ども達の

ちつとも幸福さうでないのを
さて、ごうしたらよからふ

遠いふるさと

遠いふるさこの

その初冬をおもひだして

自分は郊外にきてみた

父のふるさがどちらにあるのか

そのゆくさきでうまれる子ども達は

その方角さへも知らないのだ

その子どもたちにも

そちらの雪の山々でもみせようぞ

郊外につれだつてきてみた

けれど もうさつぷりと
夕譚がたちこめてゐて
なんにもみえない

ひろびろとした夢晶にでて
自分達のみたのは

さびしい電線のはりがねさ

曲りくねつた田舎道

そのうへをさほく

おもちゃのような人力車が一つはしつてゆく
ただ、それだけ

そんなをみにきたのではなかつた
だが、さうしたものでもみてゐるさ
はるかに

はるかに

その廣い郊外のはてに

山々を越えたあちらに

いまもむかしのように、はやくし

雪で純白まっしろにうづもれてゐるであらう

自分のふるささがあり

自分を手招いてゐるのであつた

春

はるだ

はるだ

そしてあさだ

あめあがりだ

ああ いい

しつこりさぬれたつちから

たちのぼるすいじょうき

そのうへに

ひさむれのはむしがある

こなゆきのような

ごみのようなはむしだ

ふわふわ ふわふわ

はむしはちつたり

またかたまつたり

なんさいふ

たのしさうなこさだらう

ふわふわ ふわふわ

わづかにいちにち

せいぜいふつかのいのちだけれど

ああしてむしは

そのいのちのかぎりを

たのしんでゐるのだ

みんないつしよにむつまじく

ふわふわ ふわふわ

はるのあさの

このひかりのなかをおよきまわり

そのひかりをすひ

そのひかりにいきて

そしてよろこびたのしんでゐるのだ

みてゐると

まるでダンスでもしてゐるようではないか

じぶんたちにはきこへないが

きつさうたもったつてゐるだらう

ああ いい

はるだ

はるだ

そしてあさだ

あめあがりだ

それなのに

じぶんたちにんげんにばかりは

どうしてかうもくろしみやかなしみが

それこそはぐさのつるのように

からみまっはつてはなれないのか

それさあ、ああして

ただよろこびたのしんでゐるように見える
むしけらにもそれがあるのか

あのつかのまないのちのむしけらにも

いや いや

そんなことはあるまい

それにしてもあまりにはかないいきものだ

ああ、ただいのちをもつてゐるといふばかりに
むしけらばむしけらさて

よろこびたのしみ

にんげんはかなしみそしてくるしものか

だがそれでいい

それでいい

いつかはじぶんたちも

このかなしみくるしみをつきぬけて

そこにまことの

まことへのひかりをみつげるだらう

こんなはるの

こんなうらかなあさ

そのときこそはじぶんたちも

このいのちのかぎり

ふわふわ ふわふわ

ふわふわ ふわふわ

そのまことへのひかりのなかで

ゆうゆうとたれもかれもみんなめいめいに

たまじひのそのおほきなつばさをひろげるだらう

ゆめのようはなしだ

ゆめのようなはなしではあるが

そこにじぶんたちの

そればかりでいきでゐられるのぞみがあるのだ

おのおのゆめをげんじつに

おのおのげんじつにゆめに

ふわふわ ふわふわ ふわふわ

妻と語る

そのぬひばりを針坊主に刺して
まあ、きて御覧

妻よ

これがお前と自分のこしらへた畑だ
庭隅を堀りおこした

一坪ほどの土ではあるか

それでも

ここにまきつけられた種子は

ここをしんじつの母胎として

かうしていきいきと

芽をふき

葉をだし

するすると蔓までのばした

そのぬいばりを針坊主に刺して
まあ、きて御覽

妻よ

にんげんならば手のような蔓は

自分が立ててやつた槽木に

それをどんなにまぢかれてゐたのであらう

すぐ、あゝしてからみついて

いまみるさもう

遠い山脈のいただいてゐる雪のような

そんなくつきりした花を

こちらこちらにうつくしくつけはじめた

それ、ね

まつたくこれはおもちやのようの畑だけれど

かうして葉を葉があなをさ
もりあがり

かさなりあつて

風にひらひらしてゐるところは

どうみても大森林のようではないか

ほら、蝶々がやつてきた

ほら、縞さんぽがさびたつた

そこにかまきり

どこかにかくれて

鳴いてゐるきりぎりす

それから

そこらを跳ねまはつてゐるのは機織バツタの子だらう

ああ、いい

ああ、いい

まあ、きて御覧

自分達もそうした仲間であつたらなあ

妻よ

こんな酷暑だ

かんかん熬りつけられるような

そんな眞夏のまつびるまだ

いかに自分達のことはいいはないにしても

自分はしみじみ

みてゐる目でも涼しいその葉かげを

子ども達のためにおもふよ

ほんさに、これは

おもちゃのような畑ではあるが

お前と自分で

こしらへたんだ

そしてなんざいつでも

小さな可愛い蟲けらにさつては

うつくしい自然の大森林であらう

もうあんなに

筴豆もぶらさがつた

雷雨の時

遠くからごろごろと

まるで何處かで靱磨りでもはじめたようにきこえる

かみなりだ

かみなりだ

いい音だな

ほんさにひさしぶりできくん

ああ、いい

まあどうだい

なんざいふすばらしい雲だらう

きつさかくれてゐたんだらう

山の背後から

むくむくもりあがつてでてきた

はやいもんだな

みるみる

もうあんなに擴がつた

ごろごろ、ごろごろ

ほんさにいい音だ

だんだんちかくなつてくるやうだな

や、ひかつたぞ

あれ、あれ

畑の百姓達がどうだい

鉄や肥桶をひつかついで

びよんびよん

びよんびよん

機織か蝗のように逃げだしたつてば

ああ、いい

たうさう雲は

自分達のあたまのうへまでかぶさつてきた
墨汁をながしたような雲だな

ああ、いい

あ、あ、縣道をおもちやのような

自轉車やじんりきの迅るこそ

犬も驅けてゆく

豚もかけてゆく

あの荷馬車はごうしたんだらう

畜生がいふこそなきかないんだな

おや、寝ころんでしまつた

あれでは

馬方も氣が氣ではあるまい

そんなことにはさんちやぐなく

かみなりはごろごろ

いなびかりはびかびか

あの彼方^{むかふ}の森や田圃のはうは

いままではつきりさみえてゐたつけが
たちまち

ぼかしたようになつてしまつた

もうふつてゐるんだらう

おや、そんなことをいつてゐるまに

ぼつり、ぼつり

ここまで、や、落ちてきた

はやいもんだな

威勢のいい雨だな

まつたく豆熱りでもしてゐるようぢやないか

ああ、いい

ああ、いい

おうい、干物^{ましもの}をはやく取りこめ
なかなかの大粒だぞ

底抜けにやつてきそうだぞ

ばらばら

ばらばら

ああ、いい

かみなりがなんだ

いなびかりがなんだ

みんな、だれもかれも素裸^{すはだか}になつて

さびだせ

さびだせ

いきかへれ

ああ、いい雨だ

いい夕立だ

これのまほりずぎたあその

そのすがすがしさもおもふがいい

からりさ洗ひきよめられたような蒼空に

大きな虹

そこで世界が

おさぎばなしの國になるんだ

おう、生きてゐるこそのがありがたさ

これだから

これだから

なんさいつても

生きることはやめられないんだ

それはありがたすぎるほごでさえある

ああ、いい

蟹

自分はそのまき一びきの蟹であつた

そして渚の小さな孔にはひこんでゆくのであつた
まあなんさいふ暗黒さだらう

自分はおもはすふりかへり

ひよつこりと首だけだして

外をながめた

そこにゐたまきには

それほごまきづかなかつたが

それこそ外は、みてもまぶしい光明遍照の世界であつた

だがごんなにくらくつても

また、ごんなに陰鬱で汚くつても

これは自分の孔だ

これが自分の孔だごおもふさうれしかつた

沁々とうれしかつた

そこにも蟹が三びきゐた

おう妻よ

子どもたちよ

わたしをまつてゐてくれたか

しかし、けふはなんにも獲物がなかつた

朝 顔

あさがほは
口を漱いでみる花だ
まづしく
ひもじく

晝

なにはなくさも松風
そのうへ
煎茶の澁味にふさはしいのは
なんさいつても晝の三日月

松 の 葉

松の葉がこぼれてゐる
どこやらに
一すぢの

風の川がある

とうもろこし

とうもろこしの花が
つまらなさうにさいてゐる

砂つぼ島だ
まつびるまの

蝶々

千草は嘘つき
——父ちゃんの
おくちから
蝶々が飛んでつた

ひぐらし

また 蜩のなく頃さなつた
かなかな かなかな
——どこかに
いい國があるんだ

秋ぐち

宗教などいふものは
もそりないのだ
ひよりりさ
天をさした一本の紫苑よ……

ゆふ月

くれがたの庭掃除
それがすむのをまつてゐたのか
すぐうしろに
月は音もなく
のつそりさでゐた

蟬

ないてゐるのは

松の梢のてつべんだ

だが、それは

蟬でもない

月でもない

—— 山村暮鳥詩集終り ——

山村暮鳥氏と私

詩と小曲

風に思ひを (他一篇)

薊

夢と童話

雨の夜

(他一篇)

悲しき暗示

(他一篇)

罪人の歎き

(他一篇)

辻の地蔵さん

幻

星

幻像の少女

旅より

なやみ

星を仰いで

編輯後記

加田 愛 咲

三 木 露 風

都 築 益 世

加 田 愛 咲

堀 江 光 兒

濱 千 鳥

小 波 夜 詩

ま ゆ め み

ま す 子

倭 文 美

美 佐 緒

山 本 登

堀 江 光 兒

山村暮鳥氏と私

加田 愛 咲

暮鳥氏と讀者諸君への手紙

1

『星のひかり』で『山村暮鳥詩集』を出すに當つて少しなりとも私の知つてゐる限りの山村暮鳥氏を書きあらはして、氏の童謡界に於けるかくれてはゐるが非常に大きい力と今日の童謡と云ふ詩の分野の確立までの氏の努力と又私達に對しての氏の暖い御恩に報ひられたらと思つて筆をおろしました。

私が氏とお知り合ひになつたのは、今房州にゐられる某牧師から山村暮鳥氏の御話を伺ひまして、ぶつさらばうな文句のお手紙を差上げたのが氏と私の最初のいさぐちだつたのです（然し私は未だ氏におめにかゝりません。然し私は氏を私の交際してゐる方の中で親しくして下さる方の一人であるを信じてゐます。）氏はその頃童謡に就いて色々考へてゐた私の意見にも眞面目にいつも答へて、私を勵まし下さいました。

若し私の父が死なゝいで私の氣持ルギヤツプさへ出来てゐなかつたら今頃は私の童謡論をまとめて氏にも見せて今までの御恩報じが出来たでせうに。

2

さて、私は前に氏の現今の童謡界の地位や功績に就いて一寸書きましたが、氏の童謡愛好者から割合に認められないのを見るに私は残念でなりません。

いつぞや、私の尊敬する現詩壇で唯一の評論家西川勉氏が私との會話の間に『童謡界で恐るべき人は

山村暮鳥氏だ』と云はれましたがこれを見ては氏の童謡は最上の價値で認められる筈です。『民衆は愚だ』と申しますがかう事ふ場合、民衆はなぜポピュラリテイがなくても氏の如き人を認めるだけの賢さがないのでせう。

『生れるとは童謡の最も必要の一條件である。私達はあせつてはならぬ。決してつくらんをせつてはならぬ。だが靜かにその生れ出づる時を待つ事が必要である。——妥協もなく、あきらめもなく純真な心持ちで』

童謡作家は——即ちポピュラリテイを求めるのでなく、甚しくは、原稿料を得んとするのではなく、その創作時にあたつて純真である作家は——山村暮鳥氏を置いて一休何人ある。

3

私はいつも、貧しく病んだ軀を茨城のある小さい町で暮してゐられる氏を思ふと、いつも涙ぐむのです。

奥さんとお子さんたちと暮してゐられる氏を思ふ時、嚴かな心で氏にむかふのです。

氏の健康であることは願はずにはゐられません。

最後にあなたの健康が増し加はつて、本誌の爲めにも一層お力を貸し下さることを。いつまでも御家族の上に健康と喜びと。あなたの上に名譽がありますやうに。

——幸ひ、此の頃の私は先の様には病みません。——

——東京、一九二三・八・一〇——

風に思ひを

いざ行かん
星あかり
かすかに照す
白き路

ひさり惱の
あるよりは
行きてすゞしき
夏の夜の
風に思ひを
まかさなん

三 木 露 風

風ぞゆく

風ひさりさぐりつゝ
遠國の果てを行くさすらひの
その果ての海原に
蒼白みかゞやける
寒き星

そを戀ひて
あゝ、ひさり
あゝ、ひさり
風ぞ行く

薊

——小曲——

都 築 益 世

薊は

六月の陽に
紫の花を咲かせる初夏の處女

薊は

麥秋の起伏する畠を
眺めて立てる田園の處女

その鍵やかな
質實さを
見るがいい

薊こそ
光あふるる
田園の初夏の處女。

夢と童話

——童話——

加 田 愛 咲

お伽噺しの

本の中

夜更けて、踊る

音がする。

誰がおどるか、

コッコツと。……

もしや、妖女が

來たかしら。

ひさり、夢見る
床の中

『母さん、母さん』
今、何時？』

雨の夜

——近刊詩集『うるんだ瞳』より——

雨が降る ふる

音もなく

五月の闇の夜に

いさもしづかに

さけてゆく——。

ひさりしづかに

なき君が髭を慄ぶとき

兩手を合せて

瘦せ細りし指を

胸にくみ——

十字を切つて

祈らまほし

五月闇に音もなく

雨はしづかに

降りつゞく——。

人買ひ舟

日暮らしの

今日の別かれに

歌を唄へば——

月見草が咲くけれど

今宵の月は

悲しき月よ。

君逆き給へば

われひとり

何が嬉しからうぞ

樂しからうぞ——。

月夜の磯邊になく千鳥

悲しき調べ身にしてみて

蒼海原をさまよひて

可愛き姿うせにけり——。

悲しき暗示

濱 千 鳥

思ひのだけを秘めてある

胸の小箱は云ひました

あの方の此頃の心は

半分だけ灰色に變つて

行きました……こ

私は氣にもしませんでした

すると亦々云ひました。

あゝ……あの方の心は

もうすつり灰色になつて了ひました

おゝ……其時

最後！——

私の胸にはもうあの方は

永遠に失せて了ひました

冷たい殘骸のみ……が

悲しい私の胸に顔えてあます

秋の雨

赤堀八重子

しのびしのびて

泣く様な

秋の小雨は

しよぼくそ

文讀む窓に

訪づれる

淋しき思ひ

抱きつゝ

暮れゆく空を

見あぐれば

れぐらに歸る小雀が

母様戀しこ

啼いてゐた

罪人の歎き

逝し春の雨の一日を
生れ来しくしき
ゆかりを歎きしかな
胸にうごめく灰色の
永世のみ國あこがるゝ
想ひ碎きてかげ漚し
地上に生くる日の限り
うみ果てつゝも闘ひて
濁世に泳ぐ身の憐れ
あゝ何ものゝたはむれぞ
身悶えつゝも巢くふ冤を
ひさり春負ひて歩み行く
人世の土のいさも冷たき

小波夜詩

幻

友を別れて
夕暮れし
我が胸の廊
音もなう
ゆきつ戻りつ
微笑むは誰れ
夕窓にひさり
居寄りて涙ぐむ
心の扉しめやかに
おさなひ來にし
絹ずれもあはれ
ゆかしきそも誰れぞ

辻の地藏さん

村の地藏さん四辻に
赤いエプロン首に掛け
雨の降る日は雨ざらし
天氣の良いときや日ざらしに
それでも黙つて坐つてゐる

ま
ゆ
み

幻

ゆ
め
子

思出は甘く悲しき
今日も又我小雨降る渚に立ちて
一人はかなき幻を追ふ
あゝ！なつかしき去年の日の君が儼

村の木兵衛道開けぞ
だまつてだんまり知らぬ顔
こ奴つんばさ木兵衛が
鉄でなぐれば痛からるに
やつぱりだんまり知らぬ顔

おはぐろさんぽが飛んで来て
地藏さんの頭に髷を結や
鴉が鳴いて日が暮れた。

なつかしき去年の日の君が儼
あゝ！永遠にかへらじ。

幻像の少女

倭 文

星

ま す 美

月なき宵の一つ星
見上ぐる乙女の目に涙。
たつた一つの悲しみを
始めて知りし乙女子は
唯ひそかなる涙もて
今宵こうして星に泣く。

悲しさは……

やるせない……病む少女の黒髪の色

憫ましさは……

音もなく散る病葉の色

歡びは……

幸ある少女の指にある指輪の色

悲しさの黒

憫ましさの黄

歡びの眞紅

そは——

幻像の少女の夢……

旅より

美 佐 緒

内海の小島廻りて行く舟の

マストに高く鷗飛び交ふ。

二つ三つ飛び交ふ鷗はの白く

入日淋しき舟旅の空。

黄昏は來たりつ舟を過ぎ行けば

波追ふ鳥の姿眞白し。

海鷗の舞ひも淋しき旅の空に

かそけく響く笛の音悲し。

進み行く舟の彼方にはの見ゆる

屋島の影の波にゆらめく。

ほの見ゆる高松の港夜は更けて

波にきらめく町の灯火。

(高松にて)

故郷の方に銀星またゝきて

孤獨の愁ひこそ身にしむ。

夜更けて星まばらなる空見れば

故郷戀し、旅の我身は。

なやみ

山 本 登

此の悲しみが

さけるなら

泣いて泣いて泣きあかそ

此淋しさが

消えるなら

聲をかぎりに唄ひませう

たつたひさしづくの

泪があれば——

此渴いた心も

うるふものを——。

星を仰いで

堀江光兒

うす暗い電燈の光に白くぼーつと浮き出てゐる掲示板が二つ三つ窓を掠める。汽車再び田舎の寒驛をはづれて暗闇の中を走りつづける。

もう、水戸驛を出てから大分走つた様だ。今まで張り詰めてゐた氣が一時にゆるんで私は又窓わくに寄つた儘なんとも云へない悲しささみしさがこみあげて来て、熱い涙は又ひさしきり頬をうるほし暫らくは頭を上げることも出来なかつた。

× 『それでは先生さようなら——不二子さんさようなら。又紅葉時には参りますよ。ごきげんよく——正ちやにもよろしくね』はもう涙に消されて了つた。そして汽車は大きく一つ煙を吐くと一緒にズシューンと揺れて微かに動き出した。

『ごきげんよく——お父様にもお母さまにもよろしく。』——先生の言葉

『はい』——私にはもう何にも言葉が出せなかつた。たゞうつむいた顔を微かに上げて又うつ向いた不二子さんさ帽子を片手に持つたま、プラントホームを離れて行く私を目送してゐられる先生が見えなくなるまで窓から首を出してうつす暗い構内をみつめてゐた。

× 『正ちやんさようなら』私は小さい正ちやんの手を

かたく握りしめてもう一度『正ちやんさようなら』と云つたけれども正ちやんは何にも答へて呉れなかつた

× 汽笛は闇にひびきわたつた。——汽車は尙走り續ける。今も尙それらを思ひ浮べるたびに涙にうるむ。なんぞ別離の悲しく淋しくある。どうせ別れなければならぬことは知りつつも尙別れを惜しむ子供心のいぢらしさに今も尙は涙ぐまぜられる。

× 汽車は走り續けてゐる。外は眞暗で星の影も仰ぎ得ない。

夜中の事だから乗りても少なく車中は割合にすいてはゐるが種々な姿の人、氣持ちの人を見出す事が出来る。

機關の音はたえまなく聞えて来る。だらしく眠りか食つてゐる人を見る時。なぜ御身はさうまでのんきに眠つて居られるのだ。貴い生命を唯一人の機關師に委ねきつて——機關師も機關師だ。多くの人の生命を易々引受けて汽車を運轉してゐる。そこにも信仰の世界は展かれて行くのだらう。

信仰と望み、それは宗教生活を描叙する語である。救は信仰に依つて享有せられ、信仰は品性の發達に於ける不斷の原動力として働き、人生の狂瀾怒濤の中に不可視の世界に固く結び付かせるものである。故に信仰は人類の理解と計量を超へたる實在の境地に對する精神の態度なりといふ極めて廣汎なる定義を下

す。アブラハムがその子イサクを獻ぐる信仰は多くの子供を得るその神の約束を無にする様だが、如何に堅い勇ましい神に對する信頼であつたらう。

希くは往昔ユダヤ人がカナンの地にての幸福なる安息の約束を不信もて受けしに倣ふ勿れ——たゞ一つの星にてもそれに導かれて如何なる苦惱、不安、恐怖にも見失ふ事なくやがて故郷カナンに行かむ。その星の如何に貴く美しきかな——

× 汽車は再び寒驛を出て闇の中うね／＼と走りつづける。私は途中どんな事が起らうと云ふ余り氣にもかけないでたゞ故郷の東京に着くのを思ひ浮べて別離の悲しい淋しい闇より逃れようともがいた。

それでもあの最後の『さようなら』がまだ耳新しく聞える様な氣がしてならない。でも又いつか逢へると思ふさ嬉しい氣がした。生きられるさ云ふ事も考えないで再び此世で逢ふ事が出来るさ易々と思ひ込むだ。

× 自分にも必ず死の來ると云ふ事を思つた時或心苦しさを感したものの時がたてば再びこんな生きるさ云ふ事、死さ云ふ事を考へなくなつて了つた。實際人間つて浮氣に出来てゐると思つた。だが此浮氣を取り去られたら、一つの事を思ひつめて自殺でもしてははれねばならないだらう。やつぱりそれでいいのだ——。プラウニンガのラビ、ベン、エズラの中に次の句がある。

『吾と共にさしなされ。最善の日は未だ至らず。初めは生命の終極の爲に造られたものである。』

ロンケフエローは又『有限の生命より無限の生命に入る境を死さ云ふ』と云つて居る。

諸行無常 是生滅法 生滅爲樂

一切の現象世界は虚空に過ぎぬ。寂滅の境地にのみ實在世界があり一切の煩悩より離れて吾もなく世もなく涅槃が理想の極致となる。以上は佛教の人生觀として恐らく大過はなからう。

我等が死は淋しいものだ。されどいたずらに歎くをやめよ。散りたる花の跡に永遠の生命を宿せる果實は將に發育せむとしてゐる。散る花を追はす永遠の果實を讚美しなければならぬ。

× 私は眠り度いと思ふけれど一人旅のことで何んだか不安で寝つかれず却つて瞳はさへて来るばかりなので昇降口に出た。涼しい風に吹かれながら又遠く離れた空に向つて涙ながらに——

——それでは先生さようなら。

——不二子さん、さようなら。お丈夫で。母様にも正ちやんにもよろしく。ごきげんよく。

また参りますよ。さようなら——

——(汽車中にて)——

誌友

○社の主旨を愛して下さる方は、ごなすでも誌友になれます。
○誌友には毎月雑誌『星のひかり』を一部づゝお送りいたします。
○誌友は『星のひかり』への投稿が出来ます。そしてその他色々の特典があります。
○社費は一月二十銭とし三ヶ月以上前金にお願いします。

投稿

○投稿は誌友に限ります。
○締切は毎月十日を致します。
○原稿はなるべく廿五字詰の原稿用紙にお書き下さい。
○紙上の匿名はおゆるし致します。
○原稿は編輯部宛にお送り下さい。
○題材形式は勿論自由です。
○原稿は戴いておきます。

東京市麹町區麹町七丁目二番地

星のひかり社編輯部

(載轉禁)

特輯号	定價金參拾錢
一月	金貳拾錢 (送料貳錢)
三月	金六拾錢 (送料共)
六月	金壹圓貳拾錢 (同)
一年	金貳圓參拾錢 (同)

お問ひ合せのときは必ず返信料を同封し下さいまし。

大正十二年八月廿八日印刷納本
大正十二年九月一日發行

編輯人 堀江光兒
東京市麹町區七丁目二番地
發行人 原虎冶郎
東京市日本橋區本石町三ノ五
印刷人 石山清
東京市京橋區新富町四ノ一
印刷所 星のひかり社印刷部
東京市日本橋區本石町三ノ五
發行所 星のひかり社
電話本局一四六五番
振替東京六三三七六番

◎讀めば必ず上達する◎

月刊『俳句と添削』(毎月一回一日發行)

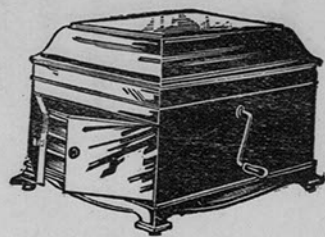
俳壇の權威たる矢田挿雲先生が助力せらるゝ處の最高科學的講評になる
「添削の傍より」は俳人の前途を照らす一大光明として、每號絶大なる好評を以て迎へられ、月毎に異常なる發展を示しつゝ、あります

【一部卅壹錢 半ヶ年壹圓七拾六錢
二ヶ年分 參圓四拾貳錢】

東京府吾嬬町請地三七

發行所 俳句と添削社

振替東京六二二六二番



毎度御引立下さいましてありがとうございます
開業一週年を迎へまして内外製品の粹を集め一層
勉強致します どうか御見捨なく御ひいきを御願
いたします

東京市麹町區麹町三丁目停留場前

蓄音器
樂器

星 光 堂

電話九段八六二番
振替東京六一五二六番

靜かにそよぐ

秋風は

木の葉の落る

こゝかしこ

こぼろぎないた

夕暮は

可愛いゝ子供の

唄を聞く



東京市京橋區南傳馬町通り

ソノベブラザーズ子供洋服部

電話京橋四九七二番

